

# 探偵見習いと化け猫

化け猫の楽しかった思い出。それは、千年も前の事だった。

二人の男女と一匹の獣の子供は満天の星空を見る事も、はっきりと見える綺麗な満月を見る事も無く、焚き火の火を見つめていた。旅で歩き疲れたのだろうか、それにしては傷の手当てした包帯が多い。それに、包帯が新しく血が滲んでいる。まるで、今手当てをしたようだ。それだから、連れの傷の具合が心配なのだろうか、それとも、痛みを感じて、その痛みを紛らわせる為だろうか、女性は男性に話を掛けた。

「ねえ、鏡、今度は西なの、それとも東、何処に向かうの。私、西に戻って都を見物したいわ。通り過ぎるだけで、何処も寄り道もしなかったからね。思い出に残る物を目に焼き付けたいの。ねえ、鏡、いいでしょう」

「そうか、うん」

鏡は腕を組んで考えた。

「そうしましょう」

「なら、天猫、お前は何処に行きたい？」

「天はね。余り人が多い所は行きたくないなあ。化け猫扱いされるしね。でも、鏡兄ちゃんと静お姉ちゃんが一緒なら何処に行っても楽しいから、でも、どうしてもって言うなら北がいいかな、僻地で人が住んで居なそうだしね」

この者達は、先史文明の最後の生き残りだろう。だが、純血で無く、この地に適応するように遺伝子操作された者だろう。それでも、元の支配者だった者だ。そして、祖先から代々退治屋をしていた。まあ、現代風に言うなら探偵であり、何でも屋だ。だが、好んで退治屋をしていたのでは無い。それは、先史文明が存在していた過去にあった。出産率が低下し続け、もう種族と名のれない程まで人口が減った。その時だ。心の安らぎや全ての職業の担い手を得る為に様々な動物の遺伝子を使い、擬人を造った。それから時が流れるにしたがい、猿の遺伝子で造られた擬人だけが増え続けた。心の安らぎの為だけに造られたからだろうか、それとも、本当の自分達の子、子孫と思っただからだろう。猿の擬人に、この地上

の支配権を快く明け渡した。そして、又、長い時が流れ、先史文明が在った事も、自分達と同じように造られたはずの擬人の事も忘れてしまった。それだけで無く、他の擬人を化け物と呼び恐れた。恐れたが何も出来ず逃げ回るだけだった。その様子を見かねて、先史文明の元々の地上の支配者だった者達は、退治屋として猿の遺伝子がある者を守る事を考え行動する事を決めた。それから長い時が流れ、元々の支配者の子孫は何故、擬人を倒さなければならぬのか、そして、自分達の故郷は何処なのか、と全ての答えを知りたくて旅を続けていた。

「そうか、なら南に行こう」

「きょうう、それは、何なのよ。誰の意見も聞かないって、どう言う事なのよ」

「何となくなあ」

「何となく、それは、理由になって無いでしょう」

「理由はあるぞ」

「何なのよ。言ってみなさい」

「天猫が行きたくない方向には、何かあるって事だろう。動物の感を信じなくてはなあ」

「まあ、南に行くなら、天と話が出来そうね。南でいいわ」

「ありがとう。静お姉ちゃん」

「天は悪くないからね。鏡が期待をもたらせるから悪いの。気分が悪いから、先に寝るわ」

そうつぶやくと、静は横になった。

「おやすみ、静お姉ちゃん」

「あつ、天、鏡が変な気持ちを考えそうだから、見張っていてね」

「うん、大丈夫だよ。見張っているから安心していいよ」

「天、そんな馬鹿、相手しなくていいぞ」

静は疲れているのだろう。横なると直ぐに寝てしまったようだ。もし、起きているのだったら苦情を言ったはず。それも、言葉でなく平手打ちくらいしたはず

だ。

「静、寝たのか。そうだな、今日の獣は手強かったからな、ありがとうなあ。おやすみ」

その言葉を聞き、天は言葉を無くした。戦いの時、怖い思いをしたのか、それとも、戦っている時に足を引っ張ったのだろう。それでも、ひと声だけ、泣き声を上げた。恐らく、ごめん、と謝ったのだろう。そう思えた。

「天も、頑張ってくれたな、これから頼むぞ」

また、天猫は小声で鳴いた。人の言葉を話せるはずだが、難しい言葉は話せ無いのだろうか、それとも、感情が高ぶると獣の言葉になるに違いない。

「如何した。可愛い鳴き声を上げて、寒いのか、それなら、私の膝の上に来るか？」

「うん、膝の上に乗る」

「いい子だ。いい子だ」

鏡は、天猫が膝の上に来ると体を撫で回した。すると、天猫は気持ちいいのだ

ろう。目を閉じ、猫の様にゴロゴロと喉を鳴らしていた。

「天、て〜ん」

（鏡兄ちゃんが呼んでいる。ああ、あのまま気持ち良くて寝ちゃったのか？）

もう今は膝の上で無く、鏡の上着の上で寝ていた。熟睡していると思い、鏡が上着の上に寝かせたのだろう。

「ガチャガチャ」

（何か音がする。何だろう。ああ、刀や武具を身に着けている音だ。ああまだ眠いなあ。でも起きなければ駄目だ）

眠そうにうつすらと目を開けた。やはり鏡と静は武具を身に付け、そして、焚き火の火を消していた。直ぐにでも出掛けるのだろう。

「天、て〜ん、て〜ん」

主人の鏡が、声を上げているが、何か変と感じた。怪我が治っているのも変だが、身に着けている武具が多い。記憶では、確か、長旅になるから鏡は長剣だけ、

静は短剣と弓矢だけのはず、なのに、重装備だった。

「天、て〜ん」

また、声が聞こえ、今度はハッキリと目を覚まし、主を見つめた。そして、

「うわあああ」

驚きの声を上げた。それは驚くはずだ。鏡が二人居るのだから、片方は静の隣で笑みを浮かべながら手を振っている。何故か声が聞こえ無いが、「出掛けるからおいで」そう言っているのだろう。もう片方は宙に浮いて笑っているが、ハッキリと言葉が分かる。

「やっとな気が付いてくれたか、それにしても夢を見るなら、彼女とかの楽しい思い出が無いのか、私達の事を思い出してくれて嬉しいが、千年も生きてきて楽しい思い出が、私達では素直に喜べないぞ」

「えっ、ええ、千年？」

天猫は意味が分からず問い掛けた。

「自分の姿を見てみる、念願の立派な大人の獣になっているぞ」

その言葉を聞くと子猫だった姿が、みるみると大きくなり、巨大な牙が生え、ライオンの様なたてがみが生えてきた。どう見ても子猫にも普通の生き物にも見えない。誰が見ても化け物と思ひ逃げ出すはずだろう。それほど、恐ろしい年老いた獣に変わった。

「あつ本当だ。強そうだ。これなら、鏡兄ちゃんと静お姉ちゃんと一緒に戦えそうだ」

自分の姿を上から見ているのに、天猫は不思議に思っていないようだ。

「それでだ。助けて欲しくて頼みに来た。他に頼める者が居ない。聞いてくれな  
いか？」

「いいよ。今の姿なら何でも出来そうだ。前の様に助けてもらおうような足手まといで無いから、安心して何でもするよ。でも静お姉ちゃんは如何したの？」

「静なら今も近くに一緒に居るぞ。その事は話が長くなるから今度ゆっくり話し

をするよ」

「うん、いいよ。それで、助けて欲しい事って何かな？」

「詳しい事は会ってから話をする。まずは、山田 海と言う男の所に来てくれ、住所などを言っても分から無いだろうから、私の気をたどって来てくれ、今は、その男の守護霊として体の中に居る」

「そうなんだ」  
「目覚めるまで、楽しい夢の続きを楽しんでくれ、いろいろ忙しくなると思うからな」

その言葉を聞き終わると、天猫は目を覚ました。そして、大きな欠伸の後、手足を大きく伸ばし、まるで、長い眠りの為に使わなかった感覚を取り戻そうとしているようだ。

「スンスン、スンスン」

真つ暗な洞窟の中だから臭いを嗅いで、出口を探そうとしているのだろうか、

何度も何度も円を描くように臭いを嗅いだ。そして、主が居る方向が分かったのだろうか、それとも出口の方向が分かったのだろうか、そして、笑みのような表情を浮かべた。人なら満面の笑みだ。最後と思える擬人を倒す時に、共に擬人と時の狭間に落ちてしまった。その主人を千年も待ち続け、そして、夢に現れてくれたのだ。それだけでなく、念願だった主の力になれる喜びが表情に表れたのだろう。

「シャアア」

洞窟から出ると、天猫は声を上げた。千年も生きてきた老猫だから気持ちを引き締めようとしたのか、それとも、残りの命を主の為に使う。そう決めた意気込みだろう。

「グルルル。ヴァルル」

また、今度は、何か呪文のように思える声を上げた。すると、子猫としか見えない姿に変わり、歩き出した。

## 第二章

真っ暗な部屋に朝日が照らされたお蔭で、室内の様子が分かるようになった。影の形で判断するならば、窓側に事務用の机が一台と、その向かいにもう一台があり。その二台で部屋を半分に分けて仕切っているように置かれ、残りの半分には応接間のようにソワーが二台と長いガラスのテーブルが置かれていた。恐らく、事務用の机は簡易台所を隠すのが目的と思えた。このような室内の影は、まあ、何処にでも有るだろう。疑問に思うのは一番長くて細長い影が有るからだ。見た感じでは人か、等身大の人形と思えば納得するのだが、洋服屋でも無いのだからマネキンと判断するのは変だ。どのように考えても物を売る店、と、言うよりも事務所だ。それなら人だろう。そう思うだろう。真っ暗な部屋にいるのは個人の自由だが、まったく動か無いのだ。呼吸をしているのかは影では判断が出来ないが、おかしな仕草をしている。まるで突然に時の流れが止まったかのような姿だ。

そして、朝日が室内を明るくなるにつれて、それが、若い男性と分かった。は

つきりと分かると、益々、その男性が人か、人形か判断が出来ない。何故だろう。

そう思うはずだ。それは、左手に飲みかけの水が入っているコップを持ち、飲み終えて唇から離れて直ぐの状態だ。そして右手には、飲み終えた菓の袋を持っていた。本当に時が止まってしまったのだろうか、そう思うだろうが、そうでは無かった。正確に時間を知らせる。そう思えるほどの力強い時計の音が響いているからだ。

「ドンドン」

「俺様のお帰りだぞ。早く鍵を開けろ」

建物の玄関の方から扉を叩く音が聞こえてきた。恐らく、酔っ払いが間違つて扉を叩いているのだろう。

「ん」

男は、その音と言葉を聞くと不審そうに顔を歪めた。そして、微かに身体も動き、これで人間と判断が出来たはずだ。

それなら何故、この男は病気なのか、そう思うだろうが、そうでは無かった。

この男は生前に父から渡された。遺言書と書かれた本。その本の通りにしか生きられない人だった。それだけでなく、人から命令をされなければ行動する事も食事を摂ることも出来なかった。それは突然に病気になったので無く、幼い頃、いや、生まれた時から自我が無かった。乳を与えるにも、母親が手元まで抱きしめ、口元まで導かないと駄目だった。それだけでなく、最後に命令のように細々と、口の開き具合から含み加減まで言い。そして吸って飲みなさい。と、言うように指示をしないと乳も飲めない赤子だった。それを見続けて育てた両親は、歳が取れば普通の子供のようになってくれる。そう思っていたのだが、七歳を過ぎても治らなかつた。その事に悲しみと息子の事が心配になり、父がある本を作成したのだ。それが、遺言書と言う。それが本の題名だ。人として生きられるように思案をして作成した。それはロボットを動かすような計算式のような内容と、全ての事柄を思案しなくても良い。辞書のような物だった。両親は、まあ、特に父親

が本のおかげで人間らしくなったはず。そう思い、一万冊、いや十万冊以上と思える数を書き残していた。まあ、母は、合っても要らない物で無いから何も言わずに好きにさせていたが、本心は友達と遊んで自然と治ってくれたと思っていた。それでも、今は、男の意識や自我は無い。そのように生まれた男を哀れと思いが使わしたのだろうか、別の人間。いや、男の先祖で、男は生まれ変わりだった。ある男が意識を支配しながら夢を見ていた。それと同時に、友人であり旅の仲間でもある。旅の友の動物も同時に同じ夢を見ていた。まあ、それは夢と現実の合わさった物だった。

「凄く強そうな獣になった。あれを見たら静かも驚くだろうなあ」

鏡は、身体が無いからだろう。人々の夢の中を幽体離脱のように渡り歩き続けた。そして、やつと、昔の旅の仲間だった。天猫に会い。又、子孫であり、生まれ変わりの男の身体に戻って来た。

### 第三章

北国にある最大の都市、その酒場通りに何をしているか分からない商いの店があった。看板が無いと言う訳でないが、有ってもペンキが接がれて読めないのは意味がないはず。それでも、五年ほど前までは、この界限では有名な、探偵事務所として営業をしていた。その主が依頼された事件を解決が出来ずに、そのまま四年間も行方不明になった。その間の心労で母が他界し、一年前に父が亡くなったと知らせが届いた。だが、亡くなった原因は、不明では無かった。酒を止められていたのだが、依頼の捜索している時に、酒を飲んだらしく。突然に倒れて入院していたのだ。亡くなる寸前まで身元が分からず。亡くなってから息子に知らせが届いたのだ。それから、その建物の一室は何をしているのか分からなくなっていた。常に電気が点いているから誰か住んでいるのだろう。それでも、誰か判断が出来た。亡くなった男の一人息子のはずと思われていた。その男を最近に見た者は居ないが、天涯孤独になった為に、毎日泣いているのだろう。そう思われていたから、誰も不審とも思わなかった。それでも、生きていられるのは、男



の幼馴染の女性が毎日訪れていた為と、その建物の中にある数件の部屋を貸し出して、賃貸契約金が入るからだろう。そう思われていた。

「ふう」

若い女性が扉の前で身だしなみを整えていた。急いで来たようだ。寝坊でもしたのだろう。そして、頷くと扉を叩いた。だが、部屋の中からは何も返事も音も聞こえてこない。何故か、その理由が分かるかのように大きな溜息を吐き、泣き出しそうな表情を浮かべた。そして、扉を開けた。部屋の中には男性が居る。それを見付けると、嬉しそうに言葉を掛けた。

「おはようございます」

動く気配も無く、返事も返ってこない。まるで、人形のように立ち尽くしている。それも、左手にコップを持ち、口から離れた直ぐの状態だ。そして、右手に飲み終えた薬の袋を持ち、机の上にも同じ薬が入っていた袋の屑がある。それを飲んだ後だろう。また、大きな溜息を吐きながら、自分の席に腰を下ろした。机

の上には書類と伝票があり。整理をしていると、柱時計が九時を知らせた。

「海さん、おはようございます」

柱時計の音に気が付いたのか、それとも、女性の言葉が自分に言われたと感じたのだろうか、コップを机に置き、何か呟いた。

「遺言書、第一巻第二章、言葉を掛けられた場合は返事をする。第一巻第一章、礼儀編、朝、昼、夜の挨拶をする」

そう真顔で言葉を吐いた。

「田中 沙耶子さん、おはようございます。今日もよろしく願います」

海は、女性に体を向け、深々とお辞儀をした。他人行儀の挨拶だが、二人は幼馴染だった。それで、沙耶子は、泣き出しそうな表情を浮かべていたのだった。

「こちらこそ、よろしく願います」

「沙耶子さん、今日の予定はありますか？」

「何も有りません、電話が掛かって来るのを待つだけですわ」

「そうですか」

「はい、そうです」

用件が終わり、又、海が固まると感じたのだろう。楽しそうに話を掛けた。

「海さん、今日は何が飲みたいですか？」

「ミントの紅茶が飲みたいです」

「いいですよ。それでは、席に座って待っていてくださいね」

「席、うん。ああ席ですね。はい、座って待っています」

海は、今始めて、席が有るのに気が付いたような感じを表した。その間、電話も来客も有るはずもなく無言のまま、ピクリとも動かず待っていた。

「お待ちしました。どうぞ」

「遺言書、第三卷第二章、あいさつ編」

「いいですよ。堅苦しい事を考えなくても、ありがとうございます。で、いいの。そして、美味しかったら、美味しいでいいのよ。もう少し欲しければ、おかわり。そう言

つてくれたら、私も嬉しいわ。それに、それだけで意味も伝わります」

幼い子供と話をするような感じだった。

「はい、ありがとうございます。美味しいです」

返事を聞いて、大きな溜息を吐くが、それでも、話しが出来て嬉しそうな笑みを浮かべ自分の席に座った。そして、時間だけが過ぎて行くが、ニコニコと紅茶を飲んでいた。仕事も無く、好きな紅茶を飲んで給料が貰えるのだから嬉しいだろう。そう思うだろうが、そうでは無かった。葬式、相続税などで、海の資産は消えるはずだったが、沙耶子の父が肩代わりしてくれたのだ。亡くなった海の父と沙耶子の父は友人であり、頼まれた事もあったが、娘と幼馴染であり、娘が好意を感じていたからだ。そのような理由があるから事実上の経営者は沙耶子と考えていいだろう。

「海さん、お代わりは有りますよ。言っして下さいね」

「はい、わかりました」